

冒襄『影梅庵憶語』 訳注 (三)

大木 康

この訳注は、『東洋文化研究所紀要』第一三六冊、第一三三七冊に掲載した「冒襄『影梅庵憶語』訳注(一)」「(二)」の後を承けるものである。底本や参照したテキスト等に関しては、第一三六冊をご覧いただければ幸いである。

依然としてよくわからない箇所は少なくない。重ねてご教示をお願いする次第である。

(38) 余家及園亭、凡有隙地皆植梅。春來早夜出入、皆爛漫香雪中。姬於含藥時、先相枝之橫斜與几上軍持相受、或隔歲便芟剪得宜、至花放怡採入供。卽四時草花竹葉、無不經營絕慧、領略殊清。使冷韻幽香、恆霏微於曲房斗室。至穠艷肥紅、則非其所賞也。

わたしの住まいや庭園では、植えられるところにはどこにでも梅の木が植えてあった。春が来ると朝晩の出入りの

たびに、馥郁と香る白梅の花の中を行くことになるのであった。彼女はまだ花がつぼみのうちから、テーブルの上の花瓶にうまく調和する枝振りのものを選んでおき、またあるいは前年のうちにうまく剪定しておいて、花が咲いてからはじめてとつて来て飾るのであった。一年四季の草花や竹葉についてもかしく計画をたて、世話のしかたに特によく通じていた。かくして、清らかで奥ゆかしい香りが、一年中奥まった小さな部屋にただよっていたのであった。色濃くごてごてした花は、彼女の好みではなかった。

【訳注】

○「軍持」。梵語の音訳。僧侶が旅をするときに携帯する水差し。浄瓶。ただしここでは花瓶のことであろう。

(39) 秋來猶耽晚菊。即去秋病中、客貽我翦桃紅。花繁而厚、葉碧如染。濃條婀娜、枝枝具雲罨風斜之態。姬扶病三月、猶半梳洗、見之甚愛、遂留榻右。每晚高燒翠蠟、以白團廻六曲、圍三面、設小座於花間、位置菊影、極其參橫妙麗、始以身入。人在菊中、菊與人俱在影中。廻視屏上、顧余曰、菊之意態盡矣。其如人瘦何。至今思之、澹秀如畫。

秋が来ると、彼女は晩菊に夢中になった。去年の秋、彼女が病に臥していたとき、ある客人がわたしに「剪桃紅」を贈ってくれた。花びらは密集して厚く、葉のみどりはまるで染めたかのようなようであった。莖はたおやかで、一本一本が雲におおわれ、風にそよんでいるかのような様子であった。彼女は三月の間病みながら、それでも何とか髪をくしけずったり顔をつくろったりしていたのだが、この花を見たいそう気に入り、ベッドのわきにおいた。每晚香りの

よいろうそくをあかあかと灯し、白い六曲の屏風で花の三方を囲み、花の中に小さな座席を設け、屏風にうつる菊の影を調節し、その美しさが完全にできあがったところで、はじめて自分が花の中に入った。彼女は菊の中に入ったから、菊の影も人の影も屏風に映ったのであった。彼女は屏風の影の方をかえり見てから、振り返ってわたしを見、「菊の美しさは完璧です。でも人が痩せ細まっているのをどうしたらよいのでしょうか」といった。今にして思えば、その清らかな美しさはまるで絵のようであった。

【訳注】

○「剪桃紅」。未詳。明の王象晋編『二如亭群芳譜』花部卷三「菊」に「剪金毬」という名の菊があり、「弁末細碎如翦」と説明している。また別に粉紅色の菊として「桃花菊」についての記載もある。

○「翠蠟」。『漢語大詞典』に「一種帶有香氣的蠟燭」とし、唐の皮日休「秋夕文宴得遙字」詩の「風吹翠蠟應難刻、日照清香太易消」ほかを引く。

○「白团廻六曲」。潘子延の英訳に従って六曲の屏風と解した。

(40) 閨中蓄春蘭九節及建蘭、自春徂秋、皆有三湘七澤之韻。沐浴姬手、尤增芳香。藝蘭十二月歌、皆以碧箋手錄粘壁。去冬姬病、枯萎過半。樓下黃梅一株、每臘萬花、可供三月挿戴。去冬姬移居香儷園靜攝、數百枝不生一藥、惟聽五鬢濤聲、增其淒響而已。

彼女の部屋には春蘭九節蘭と建蘭（秋蘭）があつて、春から秋まで三湘七沢（楚の地）の風韻がただよっていた。蘭の花が彼女の手で沐浴すると、とりわけ香気を増すのであつた。「蘭栽培十二月歌」をみどりの紙に手ずから書き写して壁に貼っていた。昨年、彼女が病気になる、その半分以上が枯れ萎んでしまつたのであつた。高殿の下に一もとの黄梅があつて、毎年十二月になるとたくさんの花が咲き、三月もの間女性たちが髪にかざすことができたところが去年彼女が香儷園に住まいを移して静養するようになると、数百もある枝に一つのつぼみもできず、ただ松風の音がきこえるばかり、ものさびしさがいやますのであつた。

【訳注】

○「春蘭九節及建蘭」。陳漢子『花鏡』巻五「蕙蘭。一名九節蘭。……後歐蘭而開。猶可繼武歐蘭。先建蘭而放。聊堪接統建蘭。則一歲芳香、半牕清供、可以綿綿不絶矣」とある。同上「建蘭」には、「其花五、六月放」とある。

○「三湘七沢」。三湘は楚の地（現在の湖南省のあたり）を流れる湘水（沅湘、瀟湘、資湘）のこと。七沢は楚の地の沼沢。三湘七沢と結びつくのは、「楚辭」に蘭がしばしば君子のたとえとして詠じられるからである。蘭の花が三湘七沢と結びつくのは、「楚辭」に蘭がしばしば君子のたとえとして詠じられるからである。

○「藝蘭十二月歌」。明の王象晉編『二如亭群芳譜』花部卷三「蘭」に「養蘭口訣」を載せている。正月から十二月に至る七言四句からなっている。明の江之源の『新鐫江道宗百花藏譜』「蘭花」にも同じ形式の「護蘭詩訣」がある。

○「香儷園」。冒襄の屋敷の一つ。詩集「香儷園偶存」がある（董其昌、鄭元勳が序を寄せている）。

○「五鬢濤声」。五鬢は松、五葉の松のこと。五粒松。「松濤声」は松の木をわたる風の音。

○冒襄には「蘭言」（如臯冒氏叢書）所収があり、蘭に関する故事や個人的な思い出などを記している。

(4) 姫最愛月、每以身隨升沈爲去住。夏納涼小苑、與幼兒誦唐人咏月及流螢納扇詩、半榻小几、恆屢移以領月之四面。午夜歸閣、仍推窗延月於枕窗間、月去復捲幔倚窗而望。語余曰、吾書謝希逸月賦、古人厭晨歡、樂宵宴。蓋夜之時逸、月之氣靜、碧海青天、霜縞冰淨。較赤日紅塵、迴隔仙凡。人生攘攘、至夜不休、或有月未出、已齁睡者、桂華露影、無福消受。與子長歷四序、娟秀浣潔、頌幽香、仙路禪關、於此靜得矣。

彼女はたいへん月が好きで、いつも月の動きに合わせて居場所を移していた。夏に庭で夕涼みをするとき、幼い息子と唐人の月や螢や納扇の詩を口ずさみ、小さな椅子と机をしきりに動かしては、いろいろな方向から月の光を受けようとするのであった。真夜中に部屋にもどつてからもまた窓を推しあけて月の光をベッドにさしまねき、月が動くともたカーテンを巻き上げ、窓辺に倚つて月を眺めていた。そしてわたしにいった。「私が臨書した謝荘の月の賦で、古人は『晨歡を厭い、宵宴を楽しむ』と書いておりましたが、それは夜の時間がすぐれてやすらかで、月の気が静かであるからです。青海原のような大空は月が輝いてますます澄み渡り、月の光を浴びて地上は霜のように白く、氷のように清らかです。それは明るい太陽が照り輝く真昼のごみごみした俗世間に比べれば、仙界と人間世界ぐらいのへだたりがあります。人にはあれやこれやであくせくして、夜になつても休まないものもおれば、月が出ないうちにいびきをかいて寝てしまふといったものもおります。そういう人には、月の下で露を帯びた桂の花の影を楽しむ福分はありません。私はあなたと長く四季の移り変わりを過ごしてきて、この清らかな風光を楽しみ、ほのかな香りを味わいました。そして仙界への道、禪の世界への入り口を静かに感得することができました」と。

【訳注】

○「謝希逸月賦」。謝希逸（莊）「月賦」（《文選》卷十三）に「君王迺厭長歡樂宵宴、收妙舞弛清泉」とある。前に小宛の書に關する記述があつたところ（第二十八段）で、「彼女がわたしの家に来たばかりのところ、董文敏（其昌）がわたしのために鍾繇の筆意で書いてくれた『月の賦』を見て、たいへん気に入り臨書した」という一節があつた。

○「霜縞冰浄」。謝莊の「月賦」に「柔祇雪凝、円靈水鏡、連觀霜縞、周徐冰浄」。張統の注に「言月之光彩照地如凝雪、照天如水鏡、觀宇庭徐皆霜冰之潔也」とある。

(42) 李長吉詩云、月漉漉、波煙玉。姬每誦此三字、則反覆廻環。曰、月之精神氣韻光景、盡於斯矣。人以身入波煙玉世界之下、眼如橫波、氣如湘煙、體如白玉、人如月矣。月復似人、是一是二。覺賈長江倚影爲三之語尙贅。至淫耽無厭化蟾之句、則得翫月三昧矣。

李長吉（賀）の詩に「月漉漉、波煙玉」とあるが、彼女はこの「波」「煙」「玉」の三字を口ずさんではいつも、何度も何度もくりかえしていた。そして「月の精神、氣韻、光景は、これに尽きています」というのであつた。彼女が体ごと波煙玉世界に入ると、その眼差しは波のよう、その息は湘江にかすむもや（煙）のよう、そして身体は白玉のよう、人あたかも月のようなのであつた。月もまた人のようで、二つで一つ、一つで二つなのである。賈長江（島）の「影に倚って三と爲る」のいい方はよけいのように思われる。「淫耽す」「厭くる無し」「蟾と化す」の句に至つて、月見の眞の境地を得ているのである。

杜茶村曰、絶域名香、重霄皓魄、奇花異茗、倚態爭芬。自非眞仙瓊媛、莫可得而領略。兼之天才麗質、把玩晨昏、玉臂雲鬢、馥郁於瑠璃世界中矣。

杜茶村曰く「絶域の名香、天高く白く輝く月、奇花異茗、それぞれに色香をあらそっている。本当の仙人、玉のような仙女でなければ、それを会得することはできないであろう。あわせて、天賦のすぐれた才質を持った人が、朝な夕なに賞玩することによって、玉のような腕、雲なすまげが浄瑠璃世界に馥郁と薫るのである。」

【訳注】

○ 以上の数段（第三十段から）、『如臯冒氏叢書本』では「紀茗香花月」としてまとめられている。

○ 「李長吉詩」。李賀の詩句は「月漉漉篇」の冒頭。王琦の『李長吉歌詩彙解』巻四「月漉漉篇」では「漉漉、月光瑩状。出於波煙之中有如玉鏡」と釈する。

○ 「体如白玉」。白玉といえば、ほかならぬ李賀についての「白玉楼中の人」の故事が思い浮かぶが、彼女が月の世界の人になつてしまったようだというので、彼女の死を暗示しているのであろうか。

○ 「賈長江倚影為三之語」。賈島の「翫月」詩に「但愛杉倚月、我倚杉為三」とある。また「淫耽、無厭、化蟾」については、賈島の同じ詩にそれぞれ「此景亦胡及、而我苦淫耽」、「不知此夜中、幾人同無厭」、「量知愛月人、身願化為蟾」とある。

○ 「玉臂雲鬢、馥郁於瑠璃世界中矣」。杜甫の「月夜」詩の「香霧雲鬢濕、清輝玉臂寒」を踏まえる。

(43) 姬性瀟泊、於肥甘一無嗜好。每飯以芥茶一小壺溫淘、佐以水菜香豉數莖粒、便足一餐。余飲食最少、而嗜香甜及海錯風薰之味、又不甚自食、每喜與賓客共賞之。姬知余意、竭其美潔、出佐盤盂。種種不可悉記、隨手數則、可觀一斑已。

彼女はあつさりしたたちで、くだいもの、甘い物はまったく好みではなかった。毎度の食事には、小さな急須で芥茶をご飯にかけ、ほんのわずかの野菜、納豆をおかずにして、それで一度の食事に十分であった。わたしは飲んだり食べたりする量はきわめて少なかったが、香ばしいもの甘い物、それに海産物、干物の類が好みで、それも一人で食べるのではなく、いつも賓客と一緒に味わうのが好きだった。彼女はそんなわたしの望みを知って、美しさ清らかさの限りを尽くして、おかずをお皿に盛りつけて出したのである。一つ一つ全部を記すことはできないが、思いつくままにいくつかを記して、その一斑を示さんとするばかりである。

【訳注】

○「肥甘」。『孟子』梁惠王上に見える。「為肥甘不足於口与、輕煖不足於体与」。

○「可觀一斑已」。底本は「可觀一斑也」に作る。『賜硯堂叢書』本に従って改めた。

(44) 釀飴爲露、和以鹽梅、凡有色香花藥、皆於初放時採漬之。經年香味顏色不變、紅鮮如摘。而花汁融液露中、入口噴鼻、奇香異艷、非復恆有。最嬌者爲秋海棠露。海棠無香、此獨露凝香發。又俗名斷腸草、以爲不食、而味美獨冠諸

花。次則梅英、野薔薇、玫瑰、丹桂、甘菊之屬。至橙黃、橘紅、佛手、香櫞、去白縷絲、色味更勝。酒後出數十種、五色浮動白瓷中、解醒消渴、金莖仙人掌、難與爭衡也。

水飴をかもしてシロップにし、それに塩漬けの梅で味をつけ、色鮮やかで香りのある花のつぼみがあれば何でも、花が開いたばかりの時に採ってそれに漬けておく。年を経ても香りと色は変わらず、赤く鮮やかなさまはまるでたつた今摘んできたばかりのようである。そして花のエキスがシロップの中に融け込み、口に入れば鼻にひろがり、そのかわった香り珍しい美しさはめつたにあるものではなかった。もつとも愛らしいのが秋海棠（ベゴニア）のシロップであった。海棠にはもともと香りがなく、ただシロップの中に浸されたときにだけ香りを発するのである。また俗に断腸草と呼ばれる一種があつて、食べられないものとされてきたが、その味のすばらしさは諸花に冠たるものである。それに次ぐのが梅の花、野薔薇、バラ、丹桂（キンモクセイ）、甘菊のたぐいである。だいたい、たちばな、仏手柑、シトロンなどは、白い糸のような繊維を取り去ることによつて、色も味も更にすぐれるのである。酒のあとなどに数十種を出せば、あざやかな五色が白磁の器の中にゆらゆらゆらぎ、二日酔いをさまし、喉のかわきをいやすことができ、金莖仙人掌であつめた仙露も太刀打ちすることができないのであつた。

【訳注】

○「断腸草。陶弘景『仙方注』に「断腸草不可食、其花美好、名芙蓉花」とある。一方「断腸花」は、『嬋媛記』巻中引く『採蘭雜志』に「断腸花 又名八月春、即今秋海棠也」とある。ここでは、断腸草を海棠の一種と取つて訳した。

○「金茎仙掌」。漢の武帝が求仙のために、仙界の露を集めるための承露盤を設けた。その承露盤を支える柱が「金茎」。また仙露を集めるために銅の仙人を作り、その掌に露を承ける盤を捧げ持ったという。それが「仙掌」である。後には「金茎仙掌」で、それらの器具で集めた仙露をも意味した。

(45) 取五月桃汁西瓜汁、一穰一絲漉盡、以文火煎至七八分、始攪糖細煉。桃膏如大紅琥珀、瓜膏可比金絲内糖。每酷暑、姬必手取其汁示潔、坐爐邊靜看火候成膏、不使焦枯。分濃澹爲數種、此尤異色異味也。

夏五月の桃の果汁、すいかの果汁をとって、ほんの少しの果肉、ほんの少しの繊維にいたるまですっかり漉し尽くし、それをとろ火で七八分の分量になるまで煮詰めたところで、はじめて砂糖を混ぜ合わせてさらにとろ火で煮込む。桃のクリームは紅い琥珀のよう、すいかのクリームは金糸内糖のようであった。いつも酷暑のときに、彼女は手ずからその果汁を取って、清潔であることを確かめ、炉の傍らに座って、静かに火加減を見てクリーム状にしてゆき、焦げ付いたりしないように気をつけた。濃度の異なる数種を作ったが、これはとりわけかわった色、かわった味であった。

【訳注】

○「金糸内糖」。未詳。宮中で作られる砂糖のことか。

(46) 製豉、取色取氣先於取味。豆黃九晒九洗爲度、顆瓣皆剝去衣膜。種種細料、瓜杏薑桂、以及釀豉之汁、極清潔以和之。豉熟擊出、粒粒可數。而香氣酣色殊味、迴與常別。

豉を作るには、よい色あいと香りをつけることが、味をつけることよりも優先する。発酵させた大豆を九回日光にさらし、九回水洗いすることをきまりとし、一粒ごとにみな豆の皮をむき去る。瓜、あんず、生姜、肉桂などの調味料から豉を発酵させる汁にいたるまで、できるかぎり清潔にして混ぜ合わせる。豉が熟成してから捧げ持つて出ると、一粒一粒を数えることができるほどであった。そしてその香りや色あいは並のものとははるかにちがっていたのである。

【訳注】

○「豉」。中山時子監修『中国食文化事典』（角川書店 一九八八）「調料」「豆豉」の項（三六五頁）では「大豆を発酵させてつくる調味料で、和名をくき、あるいは唐納豆という。黒褐色で光沢があり、豆はやわらかくかつ粒状を保ち、酸味や苦味の多いのが良品である。日本の浜納豆に似ている。広西産が有名で、宋代には名産が天下に聞こえていた。その他、広東・湖南・湖北・四川など多くの地方でつくられる。広東料理でよく使われ、塩味の濃淡により塩豉・淡豉の区別がある。四川省永川の豆豉は火鍋（鍋物）の味つけに欠かせないもので、全国的に有名である」とある。顧仲『養小録』卷上「豆豉」でも、「大青豆、苦瓜皮、飛塩、杏仁、生薑、花椒、薄荷、紫蘇、陳皮、大茴香、砂仁、白豆豉、官桂」などを材料に用いるとある。顧仲『養小録』には、中山時子監訳本（柴田書店 一九八二）がある。

(47) 紅乳腐烘蒸各五六次、内肉既酥、然後削其膚、益之以味。數日而成者、絶勝建寧三年之蓄。他如冬春水鹽諸菜、能使黃者如蠟、碧者如浴。蒲藕笋蕨、鮮花野菜、枸蒿蓉菊之類、無不採入食品、芳旨盈席。

紅乳腐を作るには、豆腐を火で炙り蒸すこと各々五六回ずつ、中の肉がさくさくしてきたところで、表面を削り落とし、調味料を加える。数日たつてできあがったものは、建寧産の三年ものよりはるかにすぐれていた。そのほか、冬春のさまざまな野菜のつけものは、黄色いものは透き通った蠟のように、緑のものは色鮮やかな苔のように作ったがま、はず、たけのこ、わらび、花、野菜、クコ、よもぎ、芙蓉、菊の類など、何でも食材として取り入れられ、よい味がテーブルにみちみちていた。

【訳注】

○「紅乳腐」。醬豆腐ともいう。豆腐を発酵させて作る副食品。中山時子監修『中国食文化事典』（角川書店 一九八八）「素材単」 「豆類」では、「紅油、醬油・醬につけたものは紅乳腐（紅豆腐）という」とある（二六三頁）。「建寧三年」は未詳。

○「冬春水鹽諸菜」。顧仲「養小録」卷中「蔬之属」に「醃菜法」ほか漬け物の製法について述べる。

○「蒲藕笋蕨、鮮花野菜、枸蒿蓉菊之類」。顧仲「養小録」卷中「蔬之属」の末尾に「餐芳譜」があり、食べられる植物とその調理法が列挙されている。

(48) 火肉久者無油、有松柏之味。風魚久者如火肉、有麋鹿之味。醉蛤如桃花、醉鱒骨如白玉。油蜩如鱒魚、蝦鬆如龍

鬚、烘兔酥雉如餅餌、可以籠而食之。菌脯如鷄塊、腐湯如牛乳。細考之食譜、四方鄔厨中一種偶異、卽加訪求、而又以慧巧變化爲之、莫不異妙。

ハムの年月のたつたものは脂気がぬけて、松柏の味わいであつた。干物魚の年月のたつたものはハムのようで、麩（鹿の一種）の肉の味わいであつた。酒漬けのはまぐりは桃の花のような色合い、酒漬けのちようざめの頭の軟骨は白玉のようであつた。油ののつた真魚鱈はちようざめのようにであり、えびのそぼろはアスパラガスのよう、あぶつた兎の肉、柔らかくした雉は饅頭のようにして、蒸籠でふかして食べることができた。干したきのこは鶏のよう、腐湯は牛乳のようであつた。彼女は丹念に食譜をしらべ、四方のすぐれた厨房でたまたま珍しいものにでくわすと、すぐに訪ねていつて教えを請うた。それに彼女の知恵で変化を加えて作つたのだから、変わつていてすばらしくないものはなかつたのである。

杜茶村曰、一七一瓣、異香絶味、使人作五鯖八珍之想。

杜茶村曰く「一匙の料理、ひとかけらの肉もすばらしい味、すばらしい香りであつて、五侯鯖や八珍のようだと思わせるのである。」

【訳注】

○ 以上の数段、「如臯冒氏叢書本」では「紀飲食」としている。

○ 「松柏之味」。『論語』子罕篇に「歲寒然後知松柏之後彫也」。常に変わらぬ高雅な味わいということであろう。

○ 「麋」。中山時子監修『中国食文化事典』（角川書店 一九八八）「素材単」「野味」に「麋」についての記述がある（三四一頁）。小型の鹿類で、肉はやわらかくて味もよく、上等な野味食品とされているとある。

○ 「蝦鬆」。顧仲『養小録』卷下「魚之属」に「蝦鬆」についての記述がある。

○ 「郇厨」。郇国公に封ぜられた唐の韋陟は贅沢を極め、美食家であったことから、美食の家を「郇公厨」と称する。『新唐書』卷一二二本伝に見える。

○ 「五鯖八珍」。「五鯖」は「五侯鯖」のこと。漢の婁護が五侯のもとで振る舞われた美食のこと。『西京雜記』卷二に見える。「八珍」は龍肝、鳳髓ほか八種の珍しい食べ物。

(49) 甲申三月十九之變、余邑清和望後、始聞的耗。邑之司命者甚懦、豺虎爭蹙踞城内、聲言焚劫。郡中又有興平兵四潰之警。同里紳衿大戸、一時鳥獸駭散、咸去江南。余家集賢里、世恂讓、家君以不出門自固。閱數日、上下三十餘家、僅我竈有炊煙耳。老母荆人懼、暫避郭外、留姬侍余。姬扃內室、經紀衣物書畫文券、各分精粗、散付諸僕婢、皆手書封識。

甲申（崇禎十七年 一六四四 冒襄三十四歲）三月十九日の變事について、わが如臯県では四月の十五日過ぎになつてはじめて確報に接した。県の命を司るもののはなはだ意氣地がなかつたために、凶悪なものたちが県城内に居座

つて、放火略奪をするといいたてた。揚州府内ではさらに、興平の兵（高傑の兵）が四方から攻めてくるとの警告もあった。それで近所の紳士や大戸たちはすぐさま蜘蛛の子を散らすように、みな長江の南に逃げていってしまった。わたしは集賢里に家をかまえて、代々おとなしく暮らしてきたので、父上は門の外に出ないことによつて自ら守ることに決した。数日すると、近所の三十余家では、うちのかまどだけから炊事の煙があがるといったあたりまでであった。年老いた母と妻はこわがって、しばらく城外に避難し、彼女を残して私の世話をさせた。彼女は奥の間にカギをかけ、衣服、書画、文書などを整理し、それぞれ大事なものとそうでないものに分け、下男下女に分散して託し、自分で封の識語を書いた。

【訳注】

○「甲申三月十九之變」。李自成によつて北京が陥落し、崇禎帝が自縊して明王朝が滅んだこと。その知らせは如皐では約一月おくれで到着した。明の滅亡のニュースの伝達については、岸本美緒『「歴年記」に見る清初地方社会の生活』（『史学雑誌』第九五編第六号 一九八六）を参照。ちなみに『歴年記』の著者である松江府上海県の郷紳姚廷燾は、五月五日ごろに第一報に接している。

○「邑之司命者甚儒」。ここではなはだ弱虫だったといわれている県の司命（知県）は、『如皐県志』巻十五「名宦」によつて李丹衷であるとわかる。浙江嘉興県の人。進士。崇禎末年に知県になったが、乱賊の陳君悦が陣をかまえ、脅しつけたために、「有司威令不行、遂掛冠去」とある。

○「興平兵」。興平とは、興平伯に封ぜられた高傑のこと。高傑はもと李自成の部下であったが、明に帰順した。『明史』巻二七三の伝に次のようにある。「京師陷、傑南走、福王封傑興平伯、列於四鎮、領揚州、駐城外。傑固欲入城、揚州民畏傑不納。傑

攻城急、日掠廂村婦女、民益惡之。」

○「集賢里」。『如臯臯志』卷三建置「街」に「集賢街」が見える。

(50) 群橫日劫、殺人如草。而隣右人影落落如晨星、勢難獨立。只得覓小舟、奉兩親、挈家累、欲衝險從南江渡澄江北。一黑夜六十里、抵泛湖洲朱宅。江上已盜賊蜂起、先從間道微服送家君從靖江行。夜半家君向余曰、途行需碎金無從辦。余向姬索之、姬出一布囊。自分許至錢許、每十兩可數百小塊、皆小書輕重於其上、以便倉卒隨手取用。家君見之、訝且歎、謂姬何暇精細及此。

悪党たちは毎日略奪に及び、草のように人を殺した。そしてあたりの人影も朝の星のようにまばらになってしまい、とても一人だけでやってゆける情勢ではなくなってきた。そこでやむなく小船を捜して、両親のお供をし、家族をひきつれ、危険をおかして南江から澄江（長江の南岸、江陰県）の北に渡ろうとしたのである。真夜中に六十里ばかり進み、泛湖洲の朱家についた。長江にはすでに盗賊たちが横行していたので、まず抜け道づたいに微服して父とともに靖江（長江の北岸、靖江県）から行くことにした。真夜中に父上がわたしにいった。「道中小銭がいるだろうが、それを用立てる手だてがない」と。わたしが彼女にたずねてみると、彼女は一つの布の袋を出してきた。それには分から銭までの単位で、十両ごとに数百ほどの小さなかたまりに分けてあり、その重さがすべて上に書いてあつて、急場ですぐ使えるようになっていた。父上はそれを見て、おどろきかつたためいきをついて、「彼女はいったいいつの間

にこれだけ細やかな心配りができたのだろうか」といわれた。

【訳注】

○「泛湖洲」。『如臯臯志』卷一「河渠」に「泛湖洲」の名がみえる。臯城の東南。

(5) 維時諸費較平日溢十倍、尙不肯行。又遲一日、以百金雇十舟、以百餘金募二百人護舟。甫行數里、潮落舟膠不得上。遙望江口、大盜數百人踞六舟爲犄角、守隘以俟。幸潮落不能下逼我舟。朱宅遣有力人負浪踏水馳報曰、後岸盜截歸路、不可返。護舟二百人中、且多盜黨。時十舟哄動、僕從呼號垂涕。余笑指江上衆人曰、余三世百口咸在舟、自先祖及余祖孫父子、六七十年來、居官居里、從無負心負人之事。若今日盡死盜手、葬魚腹、是上無蒼蒼、下無茫茫矣。潮忽早落、彼此舟停不相值、便是天相。爾輩無恐。卽舟中敵國、不能爲我害也。

この時、もろもろの費用は平素の十倍以上であったが、船頭たちはそれでもまだ行こうとしなかった。それでまた一日遅れになったが、百両で船十艘を雇い、百両あまりで二百人を募って、船を護らせた。やっと数里進んだところで、潮が引いて船が水底に着き、進むことができなくなってしまった。遙か彼方に長江への出口を望めば、盜賊數百人が六隻の船によって挟み撃ちにしようとして、出口の場所を守ってまちぶせしている。幸い潮が引いて我々の船の方にやってくるできない。朱家では壯健な者を遣わして、波にさからい水をけたてて急いで知らせをよこしてくれた。「後ろの岸は盜賊に押さえられていて引き返すことはできません」と。また船を護っている二百人のなかにすら盜賊の一味は少なくなかった。この時、十艘の船では大騒ぎになり、從僕たちは叫び声をあげ、涙を流した。わたしは笑って水岸にいる連中を指さしていった。「われら一家三世代百人は皆船に乗っている。先祖からはじまって

われらが祖孫父子にいたるまで、六七十年來、官僚としてまた佳人として、良心に背き人に背いたことはない。もし今日、みなが盜賊の手に死んで魚の腹の中に葬られることになったら、これは上に天もなく、下に地もないということだ。潮が急に引いてどちらの船も止まって出会わなかったのは天の助けた。だからおまえたちも恐れてはいけな。たとえ船の中じゅうが敵国であつたとしても、われわれを害することなどできようはずがない」と。

【訳注】

○「葬魚腹」。『楚辭二「漁父」に「寧赴湘流葬於江魚之腹中、安能以皓皓之白而蒙世俗之塵埃乎」と見える。

○「舟中敵国」。『史記』吳起伝に「若君不修徳、舟中之人尽為敵国也」と見える。

(52) 先夜收拾行李登舟時、思大江連海、老母幼子、從未履此奇險。萬一阻石尤、欲隨路登岸、何從覓輿輛。三鼓時以二十金付沈姓人、求雇二輿一車、夫六人。沈與衆咸詫異笑之、謂、明早一帆、未午便登彼岸。何故黑夜多此難尋無益之費。倩榜人募輿夫、觀者絶倒。余必欲此二者、登舟始行。至斯時雖神氣自若、然進退維谷、無從飛脱、因詢出江未遠、果有別口登岸通泛湖洲者。舟子曰、横去半里有小路六七里、竟通彼。余急命鼓楫至岸。所募輿車三事、恰受俯仰七人。餘行李婢婦、盡棄舟中。頃刻抵朱宅。衆始歎余之夜半必欲水陸兼備之爲奇中也。

先の晩、荷物をまとめて舟に乗ったときに思った。長江は海につながっており、老母も幼子も今までこれほどの危険な目にあつたことはない。万一強風に遮られた場合、その場で岸に上がろうとしても、駕籠や車をいっただいどこで

さがすことができようか、と。三鼓の時分（午前一時）に、二十両を沈という人に渡して、駕籠二台、車一つ、人夫六人を雇うことをたのんだ。沈も人々もみないぶかしく思い笑っていった。「明日の朝船出をすれば、昼前には向こう岸につけるだろう。なぜ真夜中に、こんな面倒なことに無益な金を使うのか」と。船頭にたのんで駕籠かきを募ったわけだから、観る者は絶倒した。わたしはこの二つが完全にそろうのをまって、はじめて舟に乗って出発したのであった。この時、気持ちの上では泰然自若としてはいても、進退きわまっていて、空を飛んで逃げるすべもなかった。それで、長江から遠くないところに、その場所から上陸して泛湖洲に通ずる入り口がないものかどうか、たずねてみた。船頭は「ここから横にそれて半里ほど行くと小さな道があつて、六七里でそこに着くことができます」といった。わたしは急いで岸まで船をこぐように命じた。募つた駕籠と車にはちようど家族の大小七人が乗ることができた。それ以外の荷物や下女などは皆船の中においてきた。かくしてほどなく朱宅についた。みんなはそこではじめて、わたしが真夜中に水陸両様の準備をしたことの奇しくも大当たりであつたことにおどろいたのであつた。

【訳注】

○「収捨行李」。底本は「捨行李」に作る。「賜硯堂叢書」本によつて「収」字を補う。

○「石尤」。石尤風。むかし尤郎に嫁した石氏が、遠くに商売に行つた尤郎を思ふばかりに病氣になつた。亡くなる時に「わたしが死んだら大風になつて、天下の婦人たちのために商旅遠行を阻みましよう」といつた故事がある（『鄭嬢記』に引く『江湖紀聞』）。逆風、暴風のこと。

○「求雇二輿一車」。底本は「二輿三車」に作る。『説庫』本その他のテキストに従つて「一車」に改めた。「夫六人」から見て

も「二輿一車」でなければなるまい。

(53) 大盜知余中遁、又朱宅聯絡數百人、爲余護發行李人口。盜雖散去、而未厭之志、恃江上法網不到、且值無法之時、明集數百人、遣人諭余、以千金相致、否則竟圍朱宅、四面舉火。余復笑答曰、盜愚甚。爾不能截我於中流、乃欲從平陸數百家中火攻之。安可得哉。然泛湖洲人、名雖相衛、亦多不軌。余傾囊召闔莊人付之、令其夜設牲酒、齊心於莊外備不虞。數百人飲酒分金、咸去他所。余卽於是夜、一手扶老母、一手曳荆人、兩兒又小、季甫生旬日、同其母付一信僕偕行、從莊後竹園深箐中蹣跚出。維時更無能手援姬。余回顧姬曰、汝速蹴步、則尾余後。遲不及矣。姬一人顛連趨蹶、仆行里許、始仍得昨所雇輿輛、星馳至五鼓、達城下。盜與朱宅之不軌者、未知余全家已去其地也。然身脫而行囊大半散矣。姬之珍愛盡失焉。姬返舍謂余、當大難時、首急老母、次急荆人兒子幼弟爲是。彼卽顛連不及、死深箐中無憾也。午節返吾廬。枉金革與城內梟獍爲伍者十旬。至中秋始渡江入南都。別姬五閱月、殘臘余棄小草回。挈家隨家君之督漕任、去江南。嗣寄居鹽官。因歎姬明大義、達權變如此。讀破萬卷者有是哉。

盜賊たちはわたしが途中で逃げたのを知り、朱宅ではまた數百人を手配して、わたしのために荷物と人とを護ってくれた。盜賊は去つたものの、かれらはまだ満足せず、長江には法の網がとどかず、しかも無法の時であつたのをよゝいことに、堂々と數百人もの衆を集め、人を遣わしてわたしにいつてきた。「千両を出せ、さもなければしまいは朱宅を囲み、四方から火をかけるぞ」と。わたしはまた笑つて答えた。「盜賊どもは愚かなかぎりだ。おまえたちは水の上でわたしをさえぎり止めることができなかつたから、こんどは平らな陸地の上で數百軒を火攻めにしようとい

うのだろうが、そんなことができるはずがない」と。しかし泛湖洲の人も、護るとはいいながら、また不屈きなものが多かった。わたしは有り金をはたいて、村中の人を呼んで与え、その晩には肉と酒を準備して、外に對して村内を一つにし不測の事態に備えようとした。数百人もの人が酒を飲み、金を分けると、みなよそへいつてしまった。わたしはすぐにその晩、片方の手で老母を支え、片方の手で妻の手をひき、二人の子供はまた小さくもあり、季甫は生まれて十日ほどしかたつていなかったもので、その母親とともに信用できる下男を同行させ、村の裏手の竹藪からよろよろと出ていったのである。この時まったく彼女に手助けをすることはできなかった。わたしは振りかえつて彼女に「おまえは急いで歩いてわれわれのあとについてきなさい。遅れてしまうと間にあわなくなるぞ」といった。彼女一人が、こけつまろびつ一里ばかりつまずき歩いて、やっとのことで昨日雇った乗り物に乗ることができた。大急ぎで五鼓（午前五時ごろ）まで走つて、城下に着いたのであつた。盗賊と朱家の悪党は、わたしの一家全員がその地を去つたのに気がつかなかったのである。しかし身は逃れたものの、荷物は大半がなくなつてしまった。彼女の大事にしていたものもすっかり失われてしまった。彼女は家にもどつてわたしにいった。「大難の時にあつて、まず老母を優先し、次に奥様、息子さん、幼い弟さまを大事にしたのは正解です。私はつまづいて遅れをとり、深い竹藪の中で死んだとしてもうらみはしません」と。端午の時にわが家にもどつたが、戦いが続き、城内の悪党と対応すること百日にわたつた。中秋になつてはじめて長江をわたつて南京に入った。彼女と別れて五カ月、十二月の末に志を棄つてもどつた。家中で父上が督漕の仕事で赴任するのに付き従つて、江南にいった。ついで海塩に仮住まいした。そこで彼女が大義に明かであつて、臨機応變の働きをするのに感心することになった。万巻の書物を読破したものであつても、これだけのことができるだろうか。

【訳注】

○「兩児又小、季甫生旬日」。この時、息子の禾書は九歳、丹書は五歳であつた。季甫は、冒襄の弟にあたる喪のこと。劉夫人の子。『冒巢民先生年譜』崇禎十七年の条に見える。

○「衽金革」。金革は、武器と甲冑。『中庸』に「衽金革、死而未厭」とある。

○「棄小草」。小草は藜草の「遠志」の別名。張華の『博物志』巻七に「遠志苗曰小草、根曰遠志」とある。『世説新語』排調篇に、隱遁の志に背いて桓温に仕えた謝安を、郝隆が「処則為遠志、出則為小草」といつてあざけつた話が見える。仕官の志を棄てて、の意。

○「隨家君之督漕任」。『冒巢民先生年譜』崇禎十七年の条に、「起憲副公山東按察司副使督理七省漕儲道」とある。

(54) 乙酉流寓鹽官、五月復值崩陷。余骨肉不過八口、去夏江上之累、緣僕婦雜沓奔赴、動至百口、又以笨重行李四塞舟車、故不能輕身去、且來窺矚。此番決計置生死於度外、肩戶不他之。乃鹽官城中、自相賊殺、甚闕。兩親又不能安、復移郭外大白居。余獨令姬率婢婦守寓、不發一人一物出城、以貽身累。即侍兩親、挈妻子流離、亦以子身往。乃事不如意、家人行李紛沓、違命而出。大兵迫橋李、雜髮之令初下、人心益皇皇。家君復先去惹山、內外莫知所措。余因與姬決、此番潰散、不似家園尙有左右之者、而孤身累重。與其臨難捨子、不若先爲之地。我有年友、信義多才、以子託之。此後如復相見、當結平生歡。否則聽子自裁、毋以我爲念。姬曰、君言善。學室皆倚君爲命、復命不自君出、君堂上膝下、有百倍重於我者。乃以我牽君之臆、非徒無益、而又害之。我隨君友去、苟可自全、誓問關匍匐以待君回。脫有不測、前與君縱觀大海、狂瀾萬頃、是吾葬身處也。方命之行、而兩親以余獨割姬爲憾、復攜之去。自此百日、皆展

轉深林僻路、茅屋漁艇。或月一徙、或日一徙、或一日數徙。飢寒風雨、苦不具述。卒於馬鞍山遇大兵、殺掠奇慘。天幸得一小舟、八口飛渡、骨肉得全。而姬之驚悸瘁瘡、至矣盡矣。

乙酉（順治二年 一六四五 冒襄三十五歲）海塩に寄寓していると、五月にはまた南京が陥落した。わたしの肉親は八人だけであつたが、去年の長江でのわざわざの原因は、下男下女たちががやがやと付き従ひ、ややもすると百人にもなろうとし、しかも荷物はやたらにかさばつて舟や車いっぱいになつていたために、身軽に動くことができず、人々のよこしまな視線を招くことになつたからなのであつた。今回は生死を度外視し、門を閉じてよそに行かないことに決した。ところが海塩の城内では殺しあいが行われ、大騒ぎであつた。両親も安心していられなかつたので、住まいを城外にある張大白の居宅に移した。わたしはひとり彼女に命じて下女たちを指揮して寓居を守らせ、一人一物たりとも城外に出て、面倒を起こさせないようにさせた。そうすれば両親に侍し、妻をつれてあちらこちらへ流れて行くにしても、独り身で行動できるのであつた。ところが事は思いどおりにはならず、家の者も荷物も命令に反して雪崩を打つたように出ていったのである。清の軍隊が嘉興に迫り、薙髮令が出されたばかりでもあつたために、人心はますます不安で落ち着かなかつた。父上は先に惹山に行つてしまわれ、家の内も外もどうにも手の施しようがなかつた。そこでわたしは彼女にいった。「現在の苦境は、以前郷里にあつて、まだ頼りになる人がいた状況とは異なつており、わたし一人で面倒なことを引き受けなければならぬ。本当に困難な状況になつておまえを捨てるよりも、先に身の振りをつけておいたほうがよいであろう。わたしに科挙同年の友人がおり、彼は信義にあつく才能もある。おまえを彼に託すことにしよう。将来もまた逢うことができたら、また楽しく暮らそうではないか。それができな

かつたなら、おまえのことは自分自身でどのようにならでも決断するように。わたしのことは考えなくてもよいから」と。彼女は「あなたのおっしゃるとおりです。家じゅうの者があなたをたよりにしています。あなたが命令なさらなかつたとしても、あなたにはご両親やお子さま達など、わたしより百倍も大切な人がおります。それなのにわたしのことで、あなたに心配をかけるとしたら、ただ無益なばかりか、かえって足を引つ張ることもなります。わたしはあなたのお友達について参ります。もし命を全うできるならば、困難の中這ってでもあなたの帰りをお待ちします。もし不測の事態があれば、以前あなたと見た荒れ狂う波がおしよせる大海を、私の死に場所といたしましょう」と答えた。ちように彼女に命じて行かせようとしていた時に、両親はわたし一人が彼女と別れるのを気の毒がつて、また連れてゆくことにしたのである。それから百日間というもの、ずっと人のいない深林をさまよい、茅屋や漁船などに転々と寝泊まりし、ある時には月に一度移り、ある時には日に一度移り、またある時には一日に何度も移動した。飢えと寒さ、風雨の苦しきは細かに述べることもできないほどであった。ついに馬鞍山で清の軍隊に出くわしたが、その殺戮のさまはきわめて凄惨なものであった。幸運なことに小舟を得て、八人が飛ぶように渡ることができ、骨肉のものは全きを得た。が、彼女は驚きと疲れからすっかり病氣になつてしまつたのである。

【訳注】

○「如臯冒氏叢書」本では、この一段の末尾に「紀同難」とあり、底本では後にある杜茶村の評（才子佳人云々）がここに置かれてゐる。

○「五月復値崩陷」。弘光帝を戴いた南京の臨時政府が壊滅したのが、順治二年の五月のことである。『明季南略』巻四によれ

ば、清軍が長江を渡つて南下したのは五月九日。五月十日には弘光帝が出奔している。

○「郭外大白居」。光緒『海塩県志』卷十五「人物伝」の張奇齡。字は符九、号は子延。万曆三十一年（一六〇三）の挙人。その後十たび会試に臨んだが及第しなかった。「然身愈躓、名愈高、志亦愈堅。研窮濂洛之学、開講席于西湖苕霅間。与黄貞父韓求仲沈无回諸名流互相切劘。華亭董宗伯其昌及張少宰鼎争延致令子弟遊門下。四方学者称为大白先生」とある。この張奇齡の息子が張惟赤であるが、冒襄『同人集』卷十二に張惟赤の「庚寅三月之望為辟疆社盟翁寿」詩が収められており、そこで海塩に避難していたことに触れている。

○「大兵迫橋李、雞髮之令初下」。五月に南京を陥落させた清軍はそこからさらに南下し、六月には杭州に入っている（『明季南略』卷五「貝勒入杭州」）。嘉興を過ぎたのはこの間であろう。

○「惹山」。光緒『海塩県志』卷五「輿地考二 山水」に「碧山、〔図経〕澉浦鎮西北五里。『澉水志』上有普明院及朱令公廟。『統澉水志』与翠屏山相对。案字典無碧字。未詳。又『澉水志』寺廟門載普明院在若山。趙『図記』亦作若山。則着為俗字明矣」とある。この海塩県の碧山であろう。

○「年友」。宋凝の注に指摘するように、孟森の「董小宛考」に、この年友は陳梁であるとしている。陳梁は本訳注においても、第十四段で言及している。光緒『海塩県志』卷十九 人物に伝がある。

○「非徒無益、而又害之」。『孟子』公孫丑上に見える表現。

○「馬鞍山」。光緒『海塩県志』卷五「輿地考二 山水」に「楊山 石塔山 馬鞍山 碧里山、〔図経〕四山並在県西南四十五里。『統澉水志』四山相連去鎮八里、馬鞍山有分金嶺」とある。この馬鞍山も海塩県の馬鞍山のことであろう。

(55) 秦谿蒙難之後、僅以俯仰八口免。維時僕婢殺掠者幾二十口。生平所蓄玩物及衣貝靡子遺矣。亂稍定、匍匐入城、

告急於諸友、卽僕被不辦。夜假蔭於方坦庵年伯。方亦竄跡初回、僅得一氈、與三兄共裹臥耳房。時當殘秋、窗風四射。翌日、各乞斗米束薪於諸家、始暫迎二親及家累返舊寓。余則感寒癩瘡沓作矣。橫白板扉爲榻、去地尺許、積數破絮爲衾、爐煨桑節、藥缺攻補。且亂阻吳門、又傳聞家難劇起、自重九後潰亂沈迷、迄冬至前僵死。一夜復甦、始得聞關破舟、從骨林肉莽中冒險渡江。猶不敢竟歸家園、暫棲海陵。閱冬春百五十日、病方稍痊。此百五十日、姬僅捲一破席、橫陳榻傍、寒則擁抱、熱則披拂、痛則撫摩。或枕其身、或衛其足、或欠伸起伏、爲之左右翼。凡病骨之所適、皆以身就之。鹿鹿永夜、無形無聲、皆存視聽。湯藥手口交進、下至糞穢、皆接以目鼻、細察色味、以爲憂喜。日食粗糲一餐、與顛天稽首外、惟跪立我前、溫慰曲說、以求我之破顏。余病失常性、時發暴怒、詬誶三至、色不少忤。越五月如一日。每見姬星鬢如蠟、弱骨如柴、吾母太恭人及荆妻憐之感之、願代假一息。姬曰、竭我心力、以殉夫子。夫子生而余死猶生也。脫夫子不測、余留此身於兵燹間、將安寄託。

秦溪で難にあつたあと、家族八人だけはかろうじて助かつた。だがこの時下男下女で殺されたものは、ほとんど二十人になろうとしていた。ふだん集めた骨董品や衣服などもすべて失つてしまつた。乱が少しおちついて、こつそり城内に入つて友人たちに救いを求めた時には、ふとんの準備すらもできなかった。夜は方坦庵年伯（拱乾）のところに庇護をもとめたが、方も跡をくらましていて戻つたばかりであり、わずかに毛布一枚しかなかつたので、三兄と一つとんでわきの小部屋に泊まつた。時に秋の終わりで、窓の四方から風が吹き込んできた。翌日は一斗の米、薪の束を家々に乞い求め、はじめて両親と家族を迎えて、もとの住まいに戻つた。わたしは悪寒を感じ、下痢発熱が同時におこつた。戸板を地面から一尺ほど離して横たえてベッドにし、ぼろぼろの綿を敷き重ね、炬には桑の枝を焚いた

が、体力を回復させ病気をうち払うための薬が欠乏していた。かつ、戦乱のために蘇州で行く手をはばまれ、また郷里では面倒な事態がおこっていることを伝え聞いて、重陽のあと意識がなくなり、冬至の前には死んだようになってしまった。ある晩正気にかえたので、険しい道にぼる舟を得て、骨や肉の林の間を危険を冒して長江を渡った。それでもまだ家にもどることはせず、しばらく海陵（泰州）に住んだ。冬から春にかけての百五十日を経て、病気がようやく少しよくなった。この百五十日の間、彼女はぼろむしろ一枚をベッドの横に置いて、わたしが寒がれば抱きかかえ、暑がればあおぎ、痛がればなでさすってくれた。あるいは彼女の身体を枕にし、あるいはわたしの足をまもり、わたしが伸びをしたり寝返りをうったりすれば左右からささえってくれた。病気の症状があると、そこをすぐにいたわってくれるのであった。永い夜、光も音もないところでも、彼女は神経をときすまさせていた。煎じ薬はみな彼女が毒味してから飲ませてくれたし、糞便などにいたっても、目鼻に近づけ、よくその色や香りを観察して、心配したり喜んだりしたのであった。彼女は一日に一度だけ粗末な食事をとり、天に向かつて（わたしの病気がなおるように）祈り礼拝するときの他は、ずっとわたしの前にひざまずいて控えており、やさしく慰め、いろいろな話をして、わたしの表情がほころぶことを求めたのであった。わたしは病のために普段の状態を失っており、ときに怒り出しては再三はずかしめを加えることがあったが、彼女は少しも逆らわなかった。こうして五カ月の間も一日のようであった。彼女のえくぼが蠟のように血の気を失い、かぼそい身体がたきぎのようになっていたのを見る度に、母の太恭人と妻とはそれを憐れみ感動し、自分達が代わって彼女を少しでも休ませようとするのであったが、彼女は「私は心のたけを尽して、旦那さまに殉じようと思っっています。旦那さまが生きているなら、私は死んでも、生きているのと同じことです。もし旦那さまに万が一のことがあれば、わたしはこんな戦乱のさなかにあつて、いったいどこに身を寄せた

らよいというのでしょう」というのであった。

【訳注】

○「秦溪。光緒『海塩県志』卷五「輿地考二 山水」に「秦溪、仇『志』県南三十六里。『嘉禾志』云、溪上法喜寺有石鑄秦溪二字。『統澍水志』在鎮北十里。自秦駐山發源、流至於此、故謂之秦溪。北通烏坵塘、南通豊山港、又謂之鹹塘河」とある。前の段で、馬鞍山で清兵に出会ったということであろう。

○「靡子遺矣。『詩経』大雅・雲漢に「周餘黎民、靡有孑遺」の表現がある。

○「方坦庵年伯」。方拱乾。桐城の人。父の冒超宗と同じ崇禎元年の進士である。『同人集』卷四に書一通が収められる。

○「三兄。『冒巢民先生年譜』によれば、冒襄には京（万曆四十五年 一六一七）に六歳で夭折」と偕（天啓元年 一六二一）に四歳で夭折、そして崇禎十七年生まれの喪の三人の弟があった。三兄とはあるいはこの喪を指すか。

○「家難劇起」。宋凝の注に、乙酉十二月、如臯で遺民が暴乱を起こし、清軍に鎮圧されたとの指摘がある。

○「無形無声」。『莊子』知北遊篇に「聴之無声、視之無形」とある。

(50) 更憶病劇時、長夜不寐、莽風飄瓦。鹽官城中、日殺數十百人、夜半鬼聲啾嘯、來我破窗前、如蝨如箭。擧室飢寒之人、皆辛苦匍睡。余背貼姬心而坐、姬以手固握余手、傾耳靜聽、淒激荒慘、歎歎流涕。姬謂余曰、我入君門整四歲。早夜見君所爲、慷慨多風義、毫髮幾微、不鄰薄惡。凡君受過之處、惟余知之亮之。敬君之心、實踰於愛君之身。鬼神譴歎畏避之身也。冥漠有知、定加默祐。但人生身當此境、奇慘異險、動靜備歷、苟非金石、鮮不銷亡。異日幸生還、

當與君敝屣萬有、逍遙物外。慎毋忘此際此語。噫吁嘻、余何以報姬於此生哉。姬斷斷非人世凡女子也。

また思い出す。病気がひどかった時、長い夜を眠ることもできず、荒れ狂う風が瓦を吹き飛ばすほどであった。海塩の城内では毎日数十人数百人という人が殺され、夜中には寂しげな鬼哭がわたしの破れた窓にまできて、蟋蟀のよう、矢音のようであった。家中の飢え凍えた人は皆労苦のためいびきをかいて眠りこけていた。わたしは背中を彼女の胸にびったりつけて座り、彼女はその手でわたしの手をしっかりと握り、耳を傾けて静かに聴いていると、そのあまりにすさまじい音に、涙がこぼれすすり泣いてしまうのであった。彼女はわたしにいった。「私はあなたの家に来てもう四年になります。一日中あなたの行動を見ていると、あなたは正義感義侠心に富み、ほんのすこしでも悪いことにはつきあわないお方です。あなたが人から受けたわざわいを私はすべて知り、すべてよくわかっています。私にとつては、あなたの心を敬うことが、実際あなたの体を愛することよりもまさっています。鬼神も賛嘆し畏れてわざわいを避けるお身体です。天はそのことを知っていて、きっとだまってお救ってくれます。しかし、人と生まれてこれだけの逆境にあたり、めったにないような危ない目をすべて経験されたのですから、金石でもないかぎり、消え去らないものは少ないのです。いつか幸いに病気が治ったら、あなたと万物を超越して、物外に自由に遊ぶことにいたしましょう。どうかいまのこの言葉を忘れないでくださいね」と。ああ、わたしはこの世で彼女にどうやって恩返しをしたらよいのだろうか。彼女は断じて世の平凡な女子ではないのだ。

杜茶村曰、才子佳人、多生亂世。如王嬙文姬綠珠、莫可縷數。姬生斯時宜矣。奔馳患難、終保玉顏無恙、首邱繡

闔。復得夫君五色彩毫、以垂不朽。孰謂其不幸歟。

杜茶村曰く「才子佳人は多く乱世に生をうけている。王昭君、蔡文姬、緑珠など数えることができないくらいである。彼女がこの時世に生まれあわせたのも、もつともなことである。困難の時に奔走しながら、その玉のかんばせを無事に保つことができ、きれいな門の中で夫に仕えながら息をひきとることができた。そのうえ夫君の五色の筆で永遠に残ることができたのである。彼女が不幸といえるものがあるだろうか。」

【訳注】

○「飄瓦」。『莊子』達生篇に見える語。

○「斂屣」。『孟子』尽心上に「舜視棄天下、猶棄斂屣也」とある。

○「逍遙物外」。『逍遙』も「物外」もともに『莊子』に見える語。

○「余何以報姬於此生哉」。底本は「余何以報姬於生死哉」に作る。『説庫』本ほかに従つて「此生」に改めた。

○「王嬪文姬緑珠」。王嬪は王昭君。匈奴の単于に嫁した。文姬は蔡文姬。彼女も、捕らえられて匈奴の左賢王の妾となった。

緑珠は石崇の侍女で、高殿から飛び降りて自殺した。

○「首邱繡闥」。首丘は「礼記」檀弓上に見える。狐が死ぬとき、住んでいた丘に首を向けて死ぬこと。

(57) 丁亥讒口鑠金、太行千盤、横起人面。余胸墳五嶽、長夏齷齪。惟早夜焚二紙告關帝君。久抱奇疾、血下數斗、腸

胃中積如石之塊以千計。驟寒驟熱、片時數千語、皆首尾無端。或數晝夜不知醒。醫者妄投以補、病益篤。勺水不入口者二十餘日。此番莫不謂其必死。余心則炯炯然、蓋余之病不從境入也。姬當大火鑠金時、不揮汗、不驅蚊、晝夜坐藥爐傍、密伺余於枕邊足畔六十晝夜。凡我意之所及與意之所未及、咸先後之。己丑秋、疽發於背、復如是百日。余五年危疾者三、而所逢者皆死疾。惟余以不死待之、微姬力、恐未必能堅以不死也。今姬先我死、而永訣時惟慮以伊死增余病、又慮余病無伊以相待也。姬之生死爲余纏綿如此。痛哉痛哉。

丁亥（順治四年 一六四七 冒襄三十七歲）ひどい讒言にあり、つづれ折の太行山が人の目の前にたちはだかったようであり、わたしの胸の中に五嶽が盛り上がったようであった。長い夏のあいだ鬱鬱として、朝晩ごとに二枚の願文を焼いて関帝君にお願いするばかりであった。ながく奇病を抱き、数斗もの下血をし、お腹の中に石のような塊が千個ほどたまっているようであった。急に寒気がしたかと思えば、急に熱がでて、わずかの間に支離滅裂なことをべらべら数千語も話し出したかと思うと、また数昼夜も意識がないこともあった。医者はやたらに強壯劑をのませるばかりで、病気はますますひどくなってしまうた。一杯の水も口に入らないことが二十日あまりにもなった。今回はきつと死ぬだろうとみんなが思った。しかし、わたしの心はさえわたっていた。それというのもわたしの病はこのきびしい境遇に由来するものではなかったからである。彼女は大火が金をとくすような暑い時にも、汗もぬぐわず、蚊も追い払わずに、昼も夜も薬炉のかたわらに座り、六十昼夜にもわたって、密かに枕の脇、足元からわたしの様子をうかがっていた。そしてわたしの気がついたことも、わたしの気がつかなかったことも、みな次から次へとやってくれたのである。己丑（順治六年 一六四九 冒襄三十九歳）の秋、背中にできものができて、また百日間もこのよう

な状態が続いた。わたしは五年の間に三回も危険な病にかかり、それはみな命にかかわる病であった。わたしはそれらの病気に死なずに対応できたわけだが、もし彼女の力がなかったとしたら、死なずにいられたかどうかかわらない。今彼女はわたしより先に死んでしまった。今わの際に、彼女は自分が死んだことでわたしの病気が増すのではないかということをお心配し、またわたしが病気になったら彼女が面倒をみられなくなることを心配していたのである。彼女は生きてても死んでもわたしのことをこれほどまでに気にかけていたわけだ。ああ、痛ましいことである。

杜茶村曰、此種精誠、格天徹地。嘔血剖心、能與龍比並忠、曾閔齊孝。萬祀千秋、傳之不朽。

杜茶村曰く「この種のまごころは、天に達し地の底に至る。血を吐き、心をひらき出すこと、その忠義は関龍逢、比干とならび、その孝行は曾参、閔子騫とひとしいのである。千年万年もお祭りし、いつまでもかわらず伝えたいものである。」

【訳注】

○「鏤金」。讒言をいう。「楚辞」九章に「故衆口其鏤金兮」とある。

○「横起人面」。李白の「送友人入蜀」詩の「山従人面起、雲傍馬頭生」による。

○「胸填五嶽」。李白の「望鸚鵡洲懷禰衡」に「五岳起方寸、隠然詎可平」とある。

○「嘔血剖心、能與龍比並忠、曾閔齊孝」。桀王に諫言して殺された関龍逢。紂王に諫言し、心臓をえぐり出されて殺された比

干。孔子の弟子のうち孝行で知られる曾參と閔子騫。

(58) 余每歲元旦、必以一歲事卜一籤於關帝君前。壬午名心甚劇、禱看籤首第一字、得憶字。蓋憶昔蘭房分半釵、如今忽把音信乖、癡心指望成連理、到底誰知事不諧。余時占玩不解、即占全詞、亦非功名語。比遇姬、清和晦日、金山別去、姬茹素歸、虔卜於虎嘯關帝君前、願以終身事余、正得此籤。秋過秦淮、述以相告、恐有不諧之歎。余聞而訝之、謂與元旦籤合。時友人在坐曰、我當爲爾二人、合卜於西華門、則仍此籤也。姬愈疑懼、且慮余見此籤中懈、憂形於面。乃後卒滿其願。蘭房半釵、癡心連理、皆天然闍閣中語。到底不諧、則今日驗矣。嗟乎。余有生之年、皆長相憶之年也。憶字之奇、呈驗若此。

わたしは毎年元旦には必ず、関帝君の前でおみくじをひいて一年の事を占つてみることにしている。壬午（崇禎十五年 一六四二）の年、名利を求めんとする気持ち（科擧に合格したい気持ち）が非常に強く、祈りながら籤の最初の一字を見てみれば、「憶」の字であった。その全文は「憶ふ昔 蘭房に半釵を分かつも、如今 忽ち音信を把りて乖る。痴心連理を成すを指望するも、到底誰か知らん事諧はざるを」であった。私はその時、口ずさみながら考えてみたがわからず、全体を考えても、それは科擧に合格するといったことではなかった。この年彼女にめぐりあい、四月一日に金山で別れてから彼女は精進ものを食べ、敬虔に虎丘の関帝君の前で、終身わたしに仕えることができるかどうか願いながら占ったところ、得たのはまさしくこの籤であった。秋に秦淮を訪れたとき、彼女はわたしにそのことを告げ、一緒になれないのではないかと心配していた。わたしは聞いて不思議に思い、元旦の籤と合致していたこ

とを話した。その時いあわせた友人が、「私が二人のために西華門で占つてあげましょう」といったが、それもやはりこの籤なのであった。彼女はよいよおそのの気持ちを抱き、わたしがこの籤を見たために、彼女に対する気持ちがうすれるのではと心配して、憂わしげな様子が表情に現れていた。ところが、後について彼女の願いがなかったのである。「蘭房、半釵、痴心、連理」というのはみな閨閣中の語である。「到底諧はず」というところ、今日それが実現してしまったのである。ああ、わたしの生ある限り、いつまでも彼女を「憶」する時である。「憶」の字の不思議な因縁は、このようにあらわれたのであった。

(59) 姫之衣飾、盡失於患難。歸來澹足、不置一物。戊子七夕、看天上流霞、忽欲以黃跳脫摹之、命余書乞巧二字、無以屬對。姫云、曩於黃山巨室、見覆祥雲眞宣爐、款式佳絶。請以覆祥對乞巧。鐫摹頗妙。越一歲、釧忽中斷。復爲之、恰七月也、余易書比翼連理。姫臨終時、自頂至踵、不用一金珠納綺、獨留跳脫不去手。以余勒書故。長生私語、乃太眞死後、憑洪都客迹寄明皇者。當日何以率書、竟令長恨再譜也。

彼女の衣裳や宝飾品などは、戦災のうちにすべて失われてしまった。帰ってきてからは少しのもので満足し、一物も置こうとしなかった。戊子（順治五年 一六四八 冒襄三十八歳）の年、空の夕焼けを見て、彼女は急に金の腕輪に文字を彫ってほしいといい、わたしに「乞巧」の二字を書かせたが、対になる文字を思いつかなかった。彼女は「以前、黄山の大きな家で、覆祥雲の眞宣炉を見ましたが、その形はすばらしいものでした。覆祥を乞巧の対にしてください」といった。彫り上がってみるとなかなかすばらしいものであった。その一年後、腕輪が突然真ん中で割

れてしまった。またそれを作ったが、あたかも七月のことであったので、わたしはこんどは「比翼」「連理」と書いてやった。彼女の臨終の時、頭の先から足の先まで、金銀宝石やはでな着物などは一つもつけず、ただ腕輪だけを手から離さなかつた。それはわたしが文字を書いたからであろう。長生殿でのささめごとは、太真の死後、洪都の人が明皇に告げ知らせたものであつた。あのときどうして軽率にもあのようなことを書いてしまい、「長恨歌」の悲劇を再び演じさせることになつたのであろうか。

【訳注】

○「覆祥雲真宣炉」。『帝京景物略』巻四「城隍廟市」に、宣炉のもようについて「漆腹以下、曰湧祥雲。鑿口以下、曰覆祥雲」とある。冒襄の「宣炉歌注」にも見える。董小宛が黄山に行つたことは、第三段に見えた。

○「比翼連理」。以下全体に白楽天の「長恨歌」をふまえている。「長恨歌」に「七月七日長生殿、夜半無人私語時。在天願作比翼鳥、在地願為連理枝」とある。この一節は鴻都の客が天上で逢つた楊貴妃から玄宗への伝言の中にある。

(60) 姫書法秀媚、學鍾太傅稍瘦。後又學曹娥。余每有丹黃、必對泓穎。或靜夜焚香、細細手錄閨中詩史成帙。皆遺跡也。小有吟咏、多不自存。客歲新春二日、即爲余抄寫全唐五七言絕句上下二卷。是日偶讀七歲女子所嗟人異雁、不工作一行歸之句、爲之凄然下淚。至夜和成八絕、哀聲怨響、不堪卒讀。余挑燈一見、大爲不憚、即奪之焚去。遂失其稿、傷哉、異哉。今歲恰以是日長逝也。

彼女の書は優れていて、鍾太傳を学びながらそれよりすこし瘦せた字だった。後に王羲之の「曹娥碑」を学んだ。私が書物を読んでいると、彼女はかならず筆硯にむかつて書き物をしていた。あるいは静かな晩に香を焚いて、丁寧に女性の詩や記録を書き写しており、それが書物の形になっていた。それらはみな彼女の遺墨になってしまった。彼女にはいくらかの詩作もあったが、多くは自分で残そうとしなかった。去年の新年二日、わたしのために全唐の五七言絶句上下二巻を書き写した。この日たまたま七才女子の「嗟く所 人雁に異なる 一行を作して帰らず」の句を読んで、悲しげに涙を流した。夜になってその詩に和して八絶句を作ったが、その声は悲しく、響きには恨みがこもっている、最後まで読むことができなかつた。わたしは灯火をかきたてて一目見たが、はなはだ面白くなく、すぐに奪い取って火にくべてしまった。かくしてその詩稿は失われてしまったのである。痛ましいこと、不思議なことであった。今年のまさしくその日に彼女は世を去つたのであった。

【訳注】

- 「為余抄写全唐五七言絶句」。底本は「抄選」に作っている。『美化文学名著叢刊』本に従つて改めた。
- 「学鍾太傳稍瘦。後又学曹娥」。小宛は鍾繇の書体を好んでいたが、鍾繇が関羽に敵対していたことを知って、「曹娥碑」を学ぶようになったということは前に見えた。おみくじも関帝廟で引いていた。関帝を信仰していたことが知られる。
- 「泓穎」。韓愈の「毛穎伝」に見える。筆と硯のこと。
- 「閨中詩史」。董小宛が女性の詩や記録を集めていたことは前出（第二十七段）。
- 「七才女子」。『全唐詩』巻七九九に見える。則天武后に召し出され、「兄を送る」という題で詩を作った。兄と妹が別れ別れ

になる内容である。そこに彼女と冒襄との将来が暗示されていると考えたのであろう。董小宛がみまかったのは、順治八年（一六五一）一月二日のことである。

(6) 客春三月、欲重去鹽官、訪患難相恤諸友。至邗上、爲同社所淹。時余正四十、諸名流咸爲賦詩。龔奉常獨譜姬始末成數千言。帝京篇連昌宮不足比擬。奉常云、子不自註、則余苦心不見。如桃花瘦盡春醒面七字、縮合己卯醉晤壬午病晤兩番光景。誰則知者。余時應之、未卽下筆。他如園次之自昔文人稱孝子、果然名士悅傾城、于皇之大婦同行小婦尾、孝威之人在樹間殊有意、婦來花下卻能文、心甫之珊瑚架筆香印屨、著富名山金屋尊、仙期之錦瑟蛾眉隨分老、芙蓉園上萬花紅、仲謀之君今四十能高舉、羨爾鴻妻佐春杵。吾邑徂徠先生、韜藏經濟一巢樸、遊戲鶯花兩閣和、元旦之蛾眉問難佐書幃、皆爲余慶得姬。詎謂我侑卮之辭、乃姬誓墓之狀耶。讀余此雜述、當知諸公之詩之妙。而去春不註奉常詩、蓋至遲之今日、當以血淚和爨噓也。

昨年の春三月、再び海塩に行つて、困難な時に助けてくれた友人たちを訪ねようとした。揚州まで来たところで、同社の皆に引き留められてしまった。わたしはその時ちようど四十歳になり、多くの著名人たちがみなわたしのために詩を作ってくれた。龔奉常（鼎孳）は彼女との始末を数千言にも及ぶ詩に作ってくれた。それは駱賓王の「帝京篇」、元稹の「連昌宮」なども比べものにならないほどであった。奉常はいった。「君が自分で注を作ってくれないと、わたしの苦心も理解されないだろう。例えば『桃花瘦盡春醒面』の七字などは、己卯（崇禎十二年）に酔っている彼女に会ったこと、壬午（崇禎十五年）に病気の彼女に会ったことの二つの光景をつづり合わせてあるのだが、

わかるものがあるだろうか」と。わたしはその時、はいと返事をしたのだが、すぐに書きはじめたわけではなかったのである。ほかにも園次（呉綺）の「昔自り文人 孝子と称す、果然たり名士 傾城を悦ぶ」、于皇（杜濬）の「大婦は同行し小婦は尾す」、孝威（鄧漢儀）の「人は樹間に在りて殊に意有り、婦は花下に来たりて却って文を能くす」、心甫（黄伝祖）の「珊瑚の架筆 香印の屨 著は名山に富む金屋の尊」、仙期（姚佳）の「錦瑟蛾眉分に随つて老い、芙蓉園上万花紅なり」、仲謀（彭孫貽）の「君今四十にして能く高挙す 羨む爾が鴻妻春杵を佐くるを」、わが県の徂徠先生の「經濟を韜藏す一巢樸、鶯花に遊戲して両閣和かなり」。元旦の「蛾眉難を問い書幃を佐く」などは、みなわたしのために彼女を得たことを祝福してくれたものである。わたしに對するこれら酒興の言葉が彼女への墓前の言葉になろうとは思わなかった。わたしのこの雑述を読んでも諸公の詩のすばらしさがわかるであろう。しかし去年の春、奉常の詩に注しなかつたのだが、思うに遅きに失した今日では、血と涙を墨にまけて書かなければならなくなつたのである。

【訳注】

○「龔奉常独譜姬始末成数千言」。龔鼎孳『定山堂詩集』卷三「金閨行為辟疆賦」を指す。賂賓王の「帝京篇」は長安の色町で、元稹の「連昌宮辭」は玄宗皇帝の時代のことを詠じており、龔鼎孳の作と形式、内容が共通している。だから、それに勝るといふのである。冒襄の「同人集」卷十二にこの四十歳の祝いに贈られた諸家の詩を収めている。龔鼎孳のは、「庚寅三月之望為辟疆社盟翁寿前一口集飲小齋酒中述金閨始末竟夜因稍次之為贈辟疆生平大節諸同人言之已詳故以此別存其概云」と題している。

○「園次之自昔文人称孝子、果然名士悦傾城」。園次は呉綺。江都の人。「同人集」卷十二に「庚寅春辟疆盟兄四十覽揆五律」

と題して載せる。

○「于皇之大婦同行小婦尾」。于皇は杜濬。黄岡の人。「同人集」卷十二に「庚寅季春奉祝辟疆盟兄暨長嫂蘇夫人四十双寿」と題して載せる。

○「孝威之人在樹間殊有意、婦来花下却能文」。孝威は鄧漢儀。泰州の人。「同人集」卷十二に「庚寅春辟疆盟兄四十覽揆五律」と題して載せる。鄧漢儀の編にかかる『詩觀』は、清初詩人の作を集めたものであるが、その初集卷四に冒襄の詩十四首を収めている。

○「心甫之珊瑚架筆香印屨、著富名山金屋尊」。心甫は黄伝祖。無錫の人。「同人集」卷十二に「辟疆盟兄相別十五年矣庚寅三月遇於邗水時值初度諸君雲集賦詩余愧老頼不文聊成小函兼書八十四字呈教」と題して載せる。

○「仙期之錦瑟蛾眉隨分老、芙蓉園上萬花紅」。仙期は姚佺。蘇州の人。「同人集」卷十二に「庚寅春辟疆盟兄四十覽揆五律」と題して載せる。

○「仲謀之君今四十能高舉、羨爾鴻妻佐春杵」。仲謀は彭孫貽。海塩の人。「同人集」卷十二に「庚寅三月之望為辟疆社盟翁壽」として載せる。彭孫貽『茗齋集』卷五には「寄如臯冒辟疆」と題して載せる。

○「吾邑徂徠先生、韜威經濟一巢樸、遊戲鶯花兩閣和」。徂徠先生は未詳。

○「元旦之蛾眉問難佐書幃」。未詳。

(62) 三月之杪、余復移寓友沂友雲軒。久客臥雨、懷家正劇。晚霽、龔奉常偕于皇園次過慰留飲。聽小奚管絃度曲、時余歸思更切、因限韻各作詩四首、不知何故、詩中咸有商音。三鼓別去。余甫着枕、便夢還家。舉室皆見、獨不見姬。急詢荆人、不答、復遍覓之、但見荆人背余下淚。余夢中大呼曰、豈死耶。一慟而醒。姬每春必抱病、余深疑慮。旋歸

則姫固無恙。因聞述此相告。姫曰、甚異。前亦於是夜夢數人強余去、匿之幸脫、其人狺狺不休也。詎知夢眞而詩籤咸來先告哉。

三月の末、わたしはまた寓居を友沂（趙而汴）の友雲軒に移した。長くよその土地におり、雨の日に横になつていと、家を思う気持ちのがげしくなつた。晩になつて雨があがり、龔奉常（鼎肇）が杜于皇（濬）、呉園次（綺）といつしよに慰めにやつてきてくれたので、かれらを引き留めて飲んだ。役者たちの管弦の演奏を聴くと、わたしは家に帰りたい想いがますますはげしくなり、そこで韻を決めてそれぞれ詩四首を作つたのだが、なぜだかわからないが、詩の中にはどれにも悲しい音である商音があつた。三鼓（午前二時ごろ）に別れ去つて行つた。わたしは床につくとすぐに夢の中で家に帰つていた。家中のものの姿がみえたが、ただ彼女だけが見えなかつた。急いで妻にたずねると答えない。また家中を捜してみたが、妻がわたしに背をむけて涙を流しているのが見えるばかりであつた。わたしは夢の中で大きな声で「死んだのか」といつて、わつと大きな泣き声をあげると目がさめた。彼女は毎年春になるとかならず病気になるから、わたしはたいへん心配になつた。すぐに帰つてみると、彼女は元気にしている。そこでこのことを彼女に告げた。彼女は「それは不思議なこと。以前その晩に夢の中で数人の人が私を無理につれ去ろうとしましたが、隠れていてさいわい助かつたのです。その人はいつまでも凶暴な叫び声をあげていました」といつた。夢が現実になり、詩籤がみな先に予言していたとは誰が思おうか。

杜茶村曰、名士名姫、精爽俱至、動與神孚。故其卜兆揮毫、宛然對語、願造物胡不少延其算耶。惜哉。

杜茶村曰く「名士名姫の精神はともにすばらしく、いつも神に通じている。だからその予言の言葉もさながら對話のようなのである。だが、神様はどうしてももう少しその命をのばしてくれなかったのだろうか。残念なことである。」

【訳注】

○『如臯冒氏叢書』本では本文末尾に「紀識」とある。

○「友沂友雲軒」。友沂は趙而汴。長沙の人。『同人集』巻五に「戊子陽月望日社集三十二芙蓉齋看月即席限韻」ほかの詩が収められる。

【訂補】

○訳注(一)六一頁、「影園」注。「年譜」に引く鄭懋嘉「中翰詩集序」によれば「を、冒襄『鄭懋嘉中翰詩集序』(『同人集』巻一)によれば」と訂正する。

○訳注(二)八七頁、錢謙益の手紙に関する注。「現存する『同人集』の諸テキストには、錢謙益の手紙を収めるものはない。ただ尺牘を収めた巻四の目録で、王思任と錢士升の間が空白になっている。あるいはここにもと錢謙益の尺牘が収められていたのではないだろうか」と記したが、その後、早稲田大学図書館蔵の道光五年刊本『同人集』を見た。この本では、巻四の目録の王思任と錢士升の間に「錢謙益 二通」の文字が見える。ただしその本文は収められていない。

○フランソワ・マルタン (興膳宏訳)「近十年のフランスにおける中国文学研究の発展(上)」(『中国文学報』第五十七冊 一九九八)により、マルティヌ・ヴァレット・エメリー (Martine Vallette Hemery) による『影梅庵憶語』の仏語訳 La

東洋文化研究所紀要 第三百二十八冊

dame aux premiers ombreux, Picquier, 1992 があることを知った。未見。

(冒襄「影梅庵憶語」訳注・完)